

## アルフハイムの歴史

アルフハイムのエルフ達は他の土地の住人達よりも有利な立場にある。彼らの寿命は非常に長いので、彼ら自身の歴史と深い係わりを持っている。彼ら自身の歴史に対する彼らの見解は、D&D®ゲーム・ワールドの他のほとんどの国家の歴史よりも真実に近いのである。

それにも拘わらず、ブラックムーアからの探検家達がエルフ自身の本来の国、エヴァーグランに初めて接触してから、まだ完全な6世代（世代の始まりから生きている者全てが次の世代の始まりの前に死ぬと仮定した場合）しか離れていないとしても、真実と伝説の間に矛盾が忍び寄ることもあるだろう。

### エルフ達が語る歴史——

人間達が言葉を持つようになるはるか以前、エルフ達はエヴァーグランという驚くべき地で勢力を増やしていた。エヴァーグランの樹々は高く、その森は豊かであった。我々の野生の兄弟達は、我々に素晴らしい娯楽を与えてくれ、我々の矢による死に名誉を添えてくれた。我々はそこで森での流儀とその人々全てが、森の恵みを分かち合う方法を学んだ。我々はそこで満ち足りていた。

しかし、遠くの世界の果てでは、ブラックムーアの邪悪な帝国が興隆し、その触手を全ての地を取り囲むように伸ばしてきていた。ブラックムーアの太った商売人宗教家達がエヴァーグランの海岸に到着した時、エルフの人々は仰天し喜んだ。我々自身の愚かさにより、我々はその者達を諸手を挙げて歓迎したのであった。

しかし、ブラックムーアの人間達は品物以上の物売りつけた。彼らは知識を売ったのだ——中身が腐敗した素晴らしい知識を。エルフの賢者達の知恵はこれらの知識に圧倒され、彼らは遠方からの侵入者達より教えられた妖術を実践し始めた。

これらの科学技術の成果は事実正當なものであったが、しかしその実行は汚れたものとなった。それらはエヴァーグランの森を汚れたものへと変えた。我々の中の賢い者達はこれらの汚れた科学技術から逃れ、ブラックムーアの下劣さに汚染されていない地を探した——それによってエルフ種族は救われたのであった。

間もなく、神はエヴァーグランに降臨して、炎の雨でブラックムーアを罰したように、エヴァーグランをも罰した。大地は太陽や月と共に動き氷は山から降りてきて去ろうとはしなかった。

炎の雨で死ななかったエルフ達は、かつてはグランランドと呼ばれ、現在では人間が南方大陸と呼ぶ地に再び集まった。しかし、その場所ですら、既にブラックムーアの冒流が感じられた。神の罰を恐れない、その地の悪賢いエルフ達は、既にエヴァーグランを滅亡に追い込んだ邪悪な科学技術を続行したいと望んでいた。

イルサンダルという我々の祖先の中で最も賢い者は、それらの言葉に耳を貸さなかった。彼は忠実な支持者達——その父祖の生活を知っており、腐敗した賢者達の言に耳を貸さなかった——を集めそれらの人々を北の荒野へと導いていった。エヴァーグランの栄光の日々にはその荒野には冬の雪だけがあったが、今では陽光、草そして... 木々があると伝えられていた。

その長い旅程の労苦と心痛は大きく、我々の民の損失も猛烈なものであった。それにも拘わらず、彼らはまずまずの、樹木で覆われた地を北方に発見してそこに落ち着き、そこをシルヴァン王国と呼んだ。

それからイルサンダルは、パラゴンとしてイモータルとなり、彼の種族に対する愛が非常に大きかったため彼は我々に生命の樹を残し、エルフ達の神となった。公正なシルヴァン王国は、神聖な樹の枝のもとに大きく成長していった。

しかし、数百年目の春を越した後、シルヴァン王国が全てのエルフの狩人達や魔法を保持するには、狭すぎるようになっていた。隠れ住む森の外を見た時、エルフ達はあまりに多くの人々と、森を囲む死した地を発見した。シルヴァン王国から脱出するための道を、先駆者達のために探さねばならなかった。

そして、我々の指導者でも最も賢い者の中から虹の小道を見出したメアリデン・スターウォッチャーが登場した。彼は新しい地を探す氏族を集め、導きをイルサンダルに請い求めた。各氏族のためにイルサンダルはその氏族の生命の樹となるべき娘木を、唯一の樹から分け与えた。こうして神の加護を受けたメアリデンは、エルフ達を導いて彼らの新たな故郷へと虹の小道を通って行った。

ああ、新発見の故郷もまた、森を破壊する人間達で充満していたのだ。怯むことなく、いつもの氏族はさらに北上し、彼らはアルタン・テーパ山脈とロックホーム山脈の間に横たわる痩せた平原を発見したのだ。人間もドワーフもハープリング達も、このような痩せた地を所

望はしなかったが、賢きメアリデンはその時約束が果たされたのを知った。

エルフの魔法使い達は、集結した。長い間、偉大なる儀式が敢行された。ついに、大地は動き、嵐雲はいつもの道を逸れ... 天からの恵みの雨が、アルフハイムに降り注いだのであった。

乾ききった土壌はその水を全て吸収し尽くしたが、植物は育たなかった。再び、儀式はとり行われたが、土壌は水を吸収するばかりで植物は一向に育たなかった。それでも、三たび魔法使い達は詠唱し、エルフ達は集って請い願った。再度雨が降った時、乾ききった土壌は潤い、ついに植物が育ちはじめたのだ。

さて、今度は他の者達が我々の新たな森を妬むようになってきた。しかし、我々はそれまでに人類をよく知っており、その裏切りに対する準備はできていた。我々の射手達は侵入者達の限界を知っており、また新たな森は一步毎に侵入者達を裏切った。我々は人間、ドワーフ、ハープリング達がこの森が我々のものであることを認めるまで、全ての侵入者達から森を守り抜いた。

今、我々は国々の中でも偉大な国家となったが、近隣のものとは違っている。我々は他者の事件に対し何の干渉もしない。我々の軍隊は至る所で恐れられている。エルフの領土からシルヴァン王国が奪われて以来、今や我々は世界中のエルフ達の真の故郷なのである。

### イモータル達とダンジョン・マスターの知る歴史——

ブラックムーアがまだ勃興し始めたばかりの頃、既にエルフ達は年老いていた。およそ5,000年前、エルフの文明はブラックムーアと反対側の果てにおいて発生した。ほぼ2,000年前にブラックムーアは強大になった。

元々エルフの文明は、今では南極の氷冠の下にある南の大陸から発生した（そこはエヴァーグランと呼ばれていた）。エルフの伝説が伝えるかつて美しい森の一角であったこの土地は、ゆっくりとした、しかし確実な人口の増加により、都市化（都市建設）の波が発生し始めた。

偉大な魔法を使うエルフの文化が絶頂に達した時（およそ3,500年前）、彼らもまた世界の残りの部分の探検を開始した。エルフ達と